

パール・パーディシャーフと  
ハイダル・ミールザー

開野 英 二

十六世紀の前半、中央アジア出身の二人の王子たち、すなわちパール・パーディシャーフとハイダル・ミールザーによって、十四—十六世紀の中央アジア史に關する、二つのすぐれた歴史書が著わされた。チャガタイ・トルコ語によるパールルの『パール・ナーマ』と、ベルシア語によるハイダルの『タリーヒー・ラシーディ』がそれである。この二つの史書は、例えていえば、中央アジア史學史の虚空に燦然と輝く二つの星である。この兩書より以前にも、また以後にも、中央アジアでは、これらに匹敵する史書は一つとして著わされていない。このように古來すぐれた史書に乏しい中央アジアで、十六世紀の前半、なぜ卓越した史書が、二種類も誕生しえたのか。

この疑問に答えるために、今回の發表では、(1)まずパールとハイダルの血縁關係を示し、(2)ついで兩者の直接的な交渉の跡をあとづけ、(3)さらに二つの史書の構成、敘述様式、共通する事象に關する記述の異同等を比較検討する事によって、(4)結論的には、ハイダルの書がパールルの書の大きな影響の下に成ったものであると思われる事、しかし兩書が、それぞれの著者がおかれた立場を、見事なほどに誠實に反映した、きわめて獨自性に富んだ貴重な史料である事を明らかにしたい。

南宋の叛將劉整

衣 川 強

一二五八年二月、蒙古の憲宗モンケは南宋征討の命令を降し、自ら四川に進出したが、翌五九年七月、合州釣魚山の軍營で病死した。憲宗自らの出陣による猛攻のため、四川各地の南宋側の軍人・官僚の多數が蒙古に投降した。憲宗の病死によって蒙古軍が北へ撤退して、四川における兩者の抗争は一時より弱まった。

咸淳七年(一二七二)より、元軍は襄陽攻略を強化し、一二七四年に陥落させた。襄陽の陥落後、臨安を目指す元軍のほか、四川においても南宋の殘存勢力の掃討が進められ、ふたたび南宋の軍人・官僚の元へ投降するものが増加した。

開慶元年(一二五九)から咸淳九年(一二七三)までの間、四川では宋元の戰鬪が停止することはなかったが、むしろ南宋側の政治や軍事の再建が進められたことを除いては、宋元交代の主要なる舞臺ではなかった。こうした一種の安定の中で、南宋の猛將劉整が、景定二年(一二六一)に蒙古側に投降した。

劉整(一二二二—一二七五)は、もともと金の支配地で生まれたが、金朝の滅亡と相前後して南宋に歸服し、孟珙の麾下で勇名をとどろかせた。のちに知瀘州・潼川安撫使になり、この時に元に投降した。南宋側の資料では叛將劉整、あるいは短かく叛整と言われる。

蒙古・元軍の主力部隊と相對峙しているときの南宋側からの投降は、その例をよく見る。實際、南宋末の四川における宋側の官僚や